

## 「場面意識」と「相手意識」

(財)NHK放送研修センター日本語センター  
エグゼクティブ・アナウンサー加藤 かとう昌男 まさお

休み時間から授業へ。授業から放課後へ。チャイムを合図に「場面」が変わるといふ習慣を、私たちは自然に身につけてきました。授業が始まれば、先生の話を聞く。返事も「うん」から「はい」に変わる。生徒同士の言葉づかいも改まる。特に意識せずにそうした切り替えを行ってきました。

ところが、最近、そうした「場面意識」が薄れてきているという話をよく耳にします。授業が始まっても席に着かない子どもたち。遅刻しても無遠慮に入室してくる生徒。私語が収まらない大学生。成人式で来賓の祝辞を聞けない若者たち、などです。

コミュニケーションの基本は、「場面」と「相手」によって適切な対応ができることです。

家の内と外、私的な場と公的な場、親しい間柄と改まった相手。その時々で話の内容も、使う言葉も変わります。家を一步出れば、そこは社会的な空間です。言葉を交わす相手のほかに、周囲の人々への配慮も必要になってきます。電車の中での携帯電話が問題になるのは、そうした「場面」への配慮が欠

けているからでしょう。社会的な「場面意識」を育てる第一歩は、やはり学校生活でしょう。教室に入る時、チャイムが鳴った時、その都度、意識を切り替えることから始めたいものです。

一方、「相手意識」を培うためには、できるだけ、初対面の相手、年齢や立場の違う人、考え方の違う人と話すことです。その出発点はやはり学校、とりわけ教師との対話でしょう。生徒にとって、先生は最も身近な大人であり、立場の違う相手です。時に応じて緊張感をもって接することが、生徒の「相手意識」を養う上で有効でしょう。よく、大人との対話を避けたがる大学生が、就職面接になって大慌てをするという話を聞きます。同世代の気の合う仲間とだけ付き合っているだけでも言葉の力は育ちません。

「総合的な学習」が始まり、地域のお年寄りや農家の人に話を聞いたり、文化の異なる外国人と話す試みが各地で進められています。国語の時間はもちろん、さまざまな機会を生かして「場面」と「相手」をふまえた言葉の力を育てていきたいものです。